

アポロ13号

志村 良知

アポロ13号を覚えておられるだろうか。月へ向かう途上で爆発事故を起こし、宇宙空間で酸素、電気、水を失いながら、月着陸船を緊急避難用に使い4日後に生還してアメリカの宇宙開発技術の真の凄さを見せつけた宇宙船である。

最初に月着陸した11号、続く12号の成功で、13号は世界中の人々のみならず、NASAの管制官にさえマンネリ感がある中で1970年4月11日13時13分にリフトオフした。そして13日、地球から33万kmのところまで支援機械船の酸素タンクのバルブ機構が内部の過剰圧力で吹き飛んだ。これは事実上の爆発で、周辺の機器を破壊し、アポロ13は生命維持用と、燃料電池用すなわち電力と水の供給源である酸素の全部を失った。

もっとも何が起きたのかは事故後の調査で明らかになったことで、飛行中は事故によって起きている結果を知らせるデータが読み取れただけだった。

アポロ13号に関してはトム・ハンクス主演の映画、何本かの事故の特集TV番組があるが、事故とそのリカバリーの状況が最も詳しく判るのは、アメリカの宇宙ジャーナリスト、H・クーパー・Jrの著書を立花隆が訳した角川文庫の「アポロ13号奇跡の生還」であろう。

本と映画は、当然統括主任管制官ジーン・クランツと直接コンソール前にいる管制員、それに3人の宇宙飛行士たちが主人公である。しかし、NHKのある番組では、NASAの若い技術者たち、軌道計算を担当した26歳の女性数学者、宇宙船を作ったメーカーの技術者たちに焦点を当てていたが、この見方は秀逸だったと思う。管制員の後ろにはこうした人たちが何人もいてバックアップし続けたのだ。彼らは宇宙開発という技術自体が若かったことから、みんな20代、30代の若者であった。

本の冒頭で立花隆も言っているが、事に及んだらあらゆるところに手を伸ばして総力を結集し、短時間でそれらをまとめ結論を出して実行する、というアメリカのシステム運用の力は、50年たった今も到底日本が及ぶところではないと思う。

(Jan 16 2025)